大正十四年二月三日第三種郵便物認可
大正十四年三月八日印刷納本十日發行

自由大學雜誌

第一卷　第三號

大正十四年三月發行

フロイド心理、夢(一)……安田德太郎
日本民族は何處から來たか(二)……土田杏村
天地玄黃……×
社會改造と教化實例……×
上田自由大學の回顧(三)……猪坂生
彙報……×
新刊……
編輯室より……

自由大學協會

フロイド心理。夢。（一）

安田德太郎

（序）フロイド心理の日本で口にせられる事は久しいが、それがありふれた簡單な紹介にとどまつて、眞のフロイドの風丰、その眞髓を私達に傳へて呉れる人は皆無である。嘗て私は自分の興味上、はたまた自分の學問上、フロイドの著書に接し、それの一部たりとも翻譯しようと試みつつ果し得なかつた。フロイドの獨文の名文、然も難解、私の精神病學の智識の淺薄、さらに、その鋭い文明批評の底に流るる驚くべき博學は、私にフロイド心理の理解を妨ぐる大きな原因であつた。數年來、私は醫學より、一歩性學、社會心理に興味を持ち始め、その研究上、フロイド心理の痛切な必要に驅られた。說の當否を暫く措いて、私は精神分析の十分なる理解に渴したのである。かやうな事情から未熟なる一學徒として、丁度一九一五年から一九一七年に渡つて、維納大學に於て男女の聽講者に述べられた、フロイド自身の精神分析の手引、その『精神分析入門の講演』『失策。夢。狂氣。』の翻譯を決心したのである。この事業は今もなほ進行中である。そして、一体いつになつて完結されるかを知らないのである。信州の自由大學の眞摯なる人人が、私と同樣に、この『新心理學』の眞髓に觸れようと望まるると想像して、この書の簡潔なる紹介を試み、併せて、私自身の淺薄なる智識から、これに對する批評と

註を附したいと思ふのである。同時に諸君と自由にこの心理學の眞面目なる研究を共にしたいと希望するのである。諸者よ。私に對して忌憚なき批評、意見、さらに多くの材料と暗示を惠まれんことを熱望する。

一。難關と最初の試み

一八八〇年にヨセフ・ブロイエルがある神經病患者の現はす徵候には意味があると言ふ發見をした。精神分析の治療法はこの發見に由來してゐる。この治療中に患者は徵候の代りに、夢を訴へる場合に出會はした。そして、このやうな夢にも同樣に意味がないだらうかと臆測しだしたのである。加ふるに、本來夢と言ふものにも神經病的な徵候が含まれてゐる。その上に、夢は健常な總ての人にも現はれる現象である。そう言ふ理由から神經病研究の補助として夢を詳細に科學的に研究してみようといふ大勢になつて來たのである。

夢の研究は何も近代に始まつたのでない。古代民族は夢の一切を非常に意義ある、實際上にも價値あるものと考へ、夢から未來の暗示を求め、夢に未來の前兆を卜さうと試みたのである。希臘人とか東洋人は夢占者を重視したのである。そして羅馬のハドリアン帝治政時にはダルヂスのアルテミドロの夢占の大著が現はれた位である。所が暗黑な中世期になつて夢占の術が非科學的な、荒唐無稽な迷信に墮し、夢に對する興味が漸次無教育者の手に這入つてしまつた。併し、近代になつてから、再び夢が科學的に研究され始めたが、その目的は單に生理學上の學說を夢に適用してみようとする範圍を

出なかつたのである。多くの醫者達も夢を精神現象と考へずに、精神生活の肉体刺戟の表現と解する位であつた。一八七六年にビンツは夢とは『身体的現象であり、一切の場合に無益な、多數の場合に病的な現象であり、丁度低き低き不毛の砂地の上に紺碧の大空が聳ゆるやうに、その上に高く宇宙の靈と不死が聳えてゐる。』と斷言した。モオリイは夢を恰も、常人の均整のとれた運動に反對した、舞踏病者の亂れ勝ちな痙攣と形容し、夢の內容を丁度『音樂を解しない人が十の指でピアノの鍵をかきまはす』時に鳴り出づる音響に比較した。諸威の學者ムルリイ・ヴルドはつひこの間『實驗的夢の研究』と言ふ尨大な二冊本を發表したが、この題目は四肢の位置を樣樣に變へるとどう言ふ夢が現はれるかといふ研究に過ぎなかつた。

夢とは一体どういふものかと一口で定義するのは大變むづかしい。それでは差當つて、總ての夢に共通な点とはどういふものかを考へてみよう。第一にその時私達は寢てゐるといふ事實である。夢とは明白に睡眠中の精神生活で、睡眠は覺醒と一見類似して、然も、非常な差違を有してゐると、已に昔アリストテレスがかう定義してゐる。併し、夢と睡眠の間にはもつと密な關係が介在してゐるらしい。人はある夢から醒める事がある。また偶然目を醒ました時、若くは無理やりに睡眠を妨げられた時屢々夢を見てゐる。だから夢は睡眠と覺醒の中間物と見做せるのである。

それでは睡眠とは一体どういふものだらうか。睡眠とは生理學上若くは生物學上の大問題であつて、今でも議論の餘地がある。まづ心理的特徵を研究してみよう。睡眠とは外界の現象から遮斷され、外

界に對する興味が消失した狀態を言ふ。外界から退き、外界の刺戟と絶緣した時に睡眠が起こる。換言すれば、外界に倦怠した時に睡眠が現はれる。寢こむ時には『私を靜かにして呉れ。私はねぶたいから。』と外界に言ふ。子供はあべこべに『私はねぶくない。ちつとも疲れてゐない。もつと起きてゐたい。』と言ふ。即ち、睡眠の生物學的目的は休養と見られ、その心理學特徴は外界に對する興味の消失と見做される。かういふ狀態は丁度誕生前の狀態、即ち母の胎内にある狀態に譬へられる。溫く、暗く、無刺戟である胎内生活は睡眠に依つて作り出す事が出來る。ある人は狹い場所に押し込められて、丁度子宮内で取つたやうな姿勢で寢こむのを見る。だから、夢とは睡眠をかきみだす覺醒時の精神活動の殘物であると申せる。そうなれば何故精神生活は全部寢こまないのか。これはある精神に休養が許されないからである。若し刺戟が加はれば、その不休の精神が反應しなければならない。そして、夢とはいかに不休の精神が睡眠時に加はつた刺戟に對して反應したかと言ふしるしと觀ぜられる。

さらに、もつと別の共通点があるか。これは一寸口で言ふのはむづかしい。睡眠の精神現象は覺醒時と全く違つてゐる。人は夢中さまざまな事を經驗したと信じてゐるが、現實ではかきみだす刺戟以外何も經驗してゐないのである。そして夢中の經驗の大部分は專ら視覺の像で行はれてゐる。同時に感情も存在して、思考がそれを一貫してゐる。何か他の感覺で經驗したやうで、それは一つの影像に過ぎないのである。夢を話すことが困難なのは、この影像を言葉で表し難いためである。この影像は頭に描く事がたやすいが、どうも口では言ひ表し難いと夢見た人がよく言ふところである。嘗てフェ

ヒネルは夢といふ劇が演ぜられる舞台は覺醒生活の舞台と全く違つたものだと言ふたことがある。

もつと共通点があるかと言ふに、この二つ以上に見付からない。一方持續時間、鮮明さ、感情の色合ひ、記憶に關しては由程の相違点がある。この点をくだくだしく語るのを罷めておかう。さきに、夢と睡眠の關係から、夢とは睡眠をかきみだす刺戟に順じた反應であると決論しておいた。これは正確實驗心理學が役に立つ唯一のとりえである。實驗心理は睡眠中に加へられた刺戟が夢を作ると云ふ事を證明して呉れた。そして、私達は時々自分達の直接の經驗からこの結論を承認する立場にある。モオリイはかやうな實驗を自分に試みてみた。夢の中にオオ・ド・コロンの香水を嗅がさした。その結果、彼はカイロのヨハン・マリヤ・ファリナの香水屋にゐた。そして、その夢の終り近くに狂氣ぢみた冒險が續いた。又頸をかるく抓らした。夢の中に發泡音と子供時代にかかつた醫者の姿が現はれた。さらに、額に一滴の水を落とさした。彼は伊太利にあつた。汗びつしよりになつて、オルキエトの白葡萄酒を呑んでゐた。さらに、もつと秀れた觀察者ヒルデルブラントは目醒時計の鈴に反應した夢を報告してゐる。

『春の朝私はそぞろ歩きをしてゐる。丁度靑ばみかけた野原を彷徨ひつゝ隣村迄やつて來た。その時私は晴著をつけ讃美歌集を小脇に抱へた村人がうち連れて教會さして行くのを見た。そうだ。そうだ。今日は日曜日なのだ。朝の祈禱がもう始まる頃なのだ。私も參會しようと思ひ付いたが、少し逆せ氣味なので、教會をとりかこむ墓地で風を入れようと思つた。墓地で色々の墓名を讀んでゐるうちに、

塔から鐘が響き渡るのを聞いた。見あぐると塔の天頂に祈禱の始めを告げる小さい鐘が目に付いた。暫しの間鐘はぢつと動かずにあつたが、間もなく鐘は搖り始めた――そして突然鐘ははつきり耳もつんざく程に鳴り響いた――非常にはつきり、非常に鋭く。私の眼は破れた。その鐘の音は目醒時計から來てゐたのであつた。

第二。『晴れ渡つた冬の日である。街路は深く雪で掩はれてゐる。橇の遠乘を試みる約束をしたが、暫く待たねばならなかつた。やがて、橇が戸口に來たと告げられた。今や出發の準備がちやんと出來上つた。――毛皮が敷かれ、足のマフがかけられた。併し、少し出發が手間どつた。馬は出發の知らせを今や遲しと待ち搆へてゐる。とうとう手綱がひつぱられ、小さい鈴が激しく搖れ、あの懷しい土耳古の軍樂を奏で始めた。非常に高く。その瞬間夢の蜘蛛の巣は破れた。これもまた目醒時針の鋭い響に外ならなかつた。

第三。『下女が皿を十二枚重ねて食堂に通ふ廊下をやつてくるのを見た。この下女の抱へてゐる瀬戸物の柱は今にも重心が外れるやうに見えた。『氣をつけろ。手の物がすべくり落ちるぞ。』と私は注意した。勿論その返事はいつもの通り私達はこんな事には慣れ切つてゐる位のものだ。私は矢張はらはらしながら見送つてゐる。だが案の條食堂の閾に躓いた。――瀬戸物は落ちた。床の上にがちやがちやと響いて粉微塵に壞れてしまつた。併しこのどこ迄も續く響は本當に皿が壞れた音ではないぞと氣が付いた。――私が目を醒ました時に知つたやうに、この響は目醒時計から來てゐるに過ぎなかつた。

此等の夢は氣のきいた非常に美しい、あの夢の通有性たる撞著の影の微塵も混じてゐないものである。此等の夢に共通なのは、大詰がいつも一つの響に由來して、覺醒時に際してこの響が目醒時計の音だと氣付いてゐる点である。この例から夢がどうして作られたかを知る以外に、もつと別の点に氣が付く。即ち、夢は目醒時計を知つてゐない。――夢の中に目醒時計が現れてゐない。――目醒時計の響を他のもので代用してゐる。夢は睡眠をかきみだした刺戟を解釋してゐるが、いつも違つた工合に解釋してゐる。これはどういふ譯だらうか。明確な答はないが、多分勝手氣儘に撰擇したらしい。併し此等の夢を解するに當つて、何故夢が覺醒刺戟を解釋するために、この響を撰擇して、他の何物かを撰擇しなかつたのであらう。同じ論法でモオリイの實驗を反駁しなくてはならなくなる。即ち與へられた刺戟はうまく夢中に現れたが、どう言ふ譯で、この刺戟が夢の中に丁度かういふ姿になつて現れたかを説明してゐない。又睡眠をかきみだした刺戟の本質について何等説明する所がない。更にこの直接刺戟によるモオリイの實驗に他の數多の夢の材料がいつもくつついてゐるではないか。實際夢を見れば常に醒めるとは限つてゐない。朝になつて、前夜の夢を回想するなら、どの点まで夢に働いたと思へる刺戟を發見出來るだらうか。私達は睡眠をかきみだす外來の刺戟は夢の一部を説明するが、夢の全部を説明しないと知つた以上は、最早かやうな方面を評價するのを思ひとどまらなくてはならなくなる。

併し私達はこの學説をすつかり抛棄してしまふ必要はない。なほ論究する餘地があるらしい。何物

に依つて睡眠がかきみだされ、何物に依つて精神が夢を形成するやうに刺戟されたかはあまり大問題でなくなつたが、若し外來の感覺刺戟が常に存在すると極まつてゐないなら、外來の代りに內臟から來た、所謂『內臟刺戟』が許されるだらう。この臆說は非常に必要なもので、夢の起原の世俗の見解にかなふものである。夢は『五臟のわづらひ』と言はれてゐるが、不幸にして、夜中に働いた內臟刺戟は覺醒後一向證明出來なくて、從つて自然根據のないものになつてしまふ。併し私達は夢が內臟刺戟に由來してゐる事實を非常な多數の經驗から立證出來る筈であり、實際上內臟の狀態が夢に影響を與へ得ると主張出來るだらう。多數の夢の內容は膀胱の充滿とか性的器管の興奮狀態と深い關係を持つてゐる。此等の明白な例から他の題目にはいらう。夢の內容を檢すると、少くとも夢にある內臟刺戟が働いたと推測するのを正しいと考へられる。即ち夢の內容には、私達が此等の刺戟の『推敲』(フェルアルバイツング)とか『描寫』(ダルステルンゲ)又は『解釋』(ドイツング)と稱してゐる物が含有されてゐる。夢の研究者セルネル(一八六一年)は夢が內臟刺戟に由來する事を力說して、それに關して立派な引證を擧げてゐる。例へばある夢で『ブロンドの髮の毛の、やさしい顏色の可愛い子供達が二列に並んで、喧嘩をしようと睨み合ひ、兩方から飛びつき、摑み合ひ、再び引き離れ元の位置に還つた。そして再び喧嘩をおつぱじめた。』セルネルは子供達の二つの列を齒と解釋してゐるのはいかにも尤もらしい。そして、この喧嘩の光景に續いて『顎から一本の長い齒を引き拔いた』夢を見た事から、自分の解釋の自信を强めたらしい。『長い、狹い、うねうねした通路』を腸の刺戟と解釋するのも尤もらしく、夢は先づ刺戟を與へる器管を、その器管と類似の物体

に依つて描寫しようと努めると言ふセルネルの主張を裏書きするやうである。從つて夢中に內在刺戟が外來刺戟と同一の役目を演じてゐると認めなければならぬやうになるが、殘念にも、ここでも內在刺戟の評價に對して抗議が湧いてくる。夢の多數に於て、內臟刺戟の解釋は不確實であり、又根據の置けないものである。外來感覺刺戟と同樣、內臟刺戟から夢とは刺戟に順ずる直接刺戟と解釋する事が覺束なくなつてくる。從つて夢の殘部がどこから由來してゐるかは已然暗黑の裡にあると言へるのである。

併し私達は此等の刺戟作用を研究する際に遭遇する夢の生活の一つの特色に注意しなくてはならない。夢は受けた刺戟を單純に再現するのでなしに、その受けた刺戟を推敲し、それに彩色を施し、それに筋をつけ、それを他のあるもので置き換へようとする。これこそ私達の興味の中心にある『夢の仕事』(トラウムアルバイト)の一側面である。即ち、この概念に依つて私達は夢の本質に非常に深く這入る事が出來るからである。若しある人がある指嗾の下で何かをやつたとする。その人はこの指嗾、このヒントに適ふ一切の仕事を仕盡すと言ひ得るだらうか。例へば、セクスピアの『マクベス』は、王が初めて三つの國土を併合した時の卽位式にあてこんだ際物劇であつたのである。併しこの歷史的好機は劇の內容を包容してゐるだらうか。この好機といふ事實が劇の偉大と神祕を說明してゐるだらうか。同樣に寢てゐる人は働く內外の刺戟は成程夢の單なる指嗾者であり得るが、と言つて、その刺戟は私達の見た夢の本質を微塵も語る事が出來ない筈である。夢の他の共通点、夢の精神生活の奇怪性は一方解し難いもの

であり、他方さらに突き詰めた追求の絲口を惠むことが覺束ない。多數の場合私達は視覺の形で夢を經驗する。その時實際に私達は視覺の刺戟を經驗してゐるのだらうか。視覺刺戟が夢の例に於て稀有なものであるのに、何故夢を視覺で經驗するのだらうか。さらに、私達が會話の夢を見たと言ふ時に、睡眠中に會話とか會話に類似した雜音が耳に達したといふ事實を證據立てる事が出來るだらうか。私達はかやうな可能性を勇敢に拋擲する事が出來ると思ふのである。

夢に共通した要素といふ問題から最早一歩も進路を切り開くことが出來ない以上、方向を一轉して夢の相違点の研究にとりかかつてみたい。夢は屢々意味のない、渾沌とした、馬鹿らしいものであるが、又一方に、意味深長な、筋の通つた、理性的な夢も存在してゐる。ここに、ある青年の打ちあけた、この筋の通つた種類の夢を語る事にしよう。『私はケルトネル街を散歩してゐました。途中Xさんに出會ひました。暫く連れ立つて歩いてゐるうちに、私はとある料理店に這入りました。私に續いて一人の紳士と二人の婦人が這入つて來て私のとつてゐる卓子に向つて腰を下ろしました。最初私はむつと癪に障りました。そして彼等の顏を見まいと努めてゐました。ところが暫時してふと注目しました時に、その人人が大そう感じの良い人なのに氣が付きました。』青年はこの夢を說明して呉れた。その前夜この青年は實際歩き慣れてゐるケルトネル街を散歩して、途中Xさんに出會つてゐるのである。夢の後段は直接の記憶ではないが、づうと以前にこれと類似した經驗に遭遇したことがあつたのである。もう一つ、ある婦人の筋の通つた夢を述べてみよう。婦人の夫がから言つた。『ピアノの調子を合せて貰はなくてはいけないね。』婦人は『琴槌の革をしかへなくては駄目でございます。』と返答した。この夢はその前日に夫婦の間でとけかはした會話をその儘繰返してゐたのであつた。此等二つの筋の通つた夢から私達は何を敎へられるだらうか。卽ち夢中に日常生活若くば日常生活に關係のある事實を反復したに過ぎないのである。若しこれが夢と名付けるものを示してゐるなら勿論樣子が大分違つてくるが、これは大問題ではなくて、寧ろ夢の少數にあてはまるものである。大抵の夢ではその前日の經驗と深い關係を發見出來ない。そして、意味のない、馬鹿らしい夢をこの方向から說明する光明はさしこまない。だがここで又一つの新しい問題に逢著した事を知る。私達は夢が何を語つてゐるかを知りたいと言ふ以上に、今の例のやうに、何の理由で又どういふ目的のため、私達は已知の事實、最近の經驗を夢中で反復するのであらうかを知りたいと思ふのである。

實驗心理は刺戟が夢の指嗾者として意義があると言ふ非常に緊要な報告を惠んで呉れた以外に大した役に立たなかつた。哲學からは私達のテエマが知識といふ上で卑しむべきものだといふ傲慢顏な非難を受ける以外に、何物も恃むに足りない。神祕科學からは何の寄與もやつてこない。歷史と民間の意見は夢が意味深い大切なもの、豫言的なものと言ふが、これとて早速受入れる事がむづかしく、勿論根據のあるものと判定出來ない。從つて私達の最初の努力も結局五里霧中を彷徨すると譬へられるのである。

併し豫期しない、今迄に目も呉れなかつた方向から一つの暗示が現れてくる。古來の智識の堆積物

とも名付けられる、偶然ではない慣用語、尤もこれとて無分別に受けとれないものだが――私達の言葉は一見奇怪に響く『畫の夢』と名付けられる物の存在を知らして呉れる。『畫の夢』とは空想である。これは非常に普遍的な、健常な人にでも病氣の人にでも觀察の出來るものである。この空想的影像の特異点は『畫の夢』といふ名稱の與へる通りで、夢のさきの二つの共通点とは何等の關係のないものである。この名稱は勿論睡眠と一向關係がない。さきの第二の共通点に關して言つても、『畫の夢』の中に經驗も幻覺も起こつてゐない。ただ單に空想するだけで、見るのでなくて、頭の中に考へるだけで足りるのである。この『畫の夢』は思春期前に現はれる。早くも子供時代の後期にもよく現はれ、成熟の年迄持續し、次いで消失してしまふ事もあり。晩年迄こびりついて殘ることもある。この空想の内容は非常に鮮明な一つの動機の差圖を受けてゐる。場面とか事件の中に我儘な功名心權力慾さてはエロチックな希望が充たされて行く。青年では大概功名心の空想が第一で、婦人では功名心は戀の勝利を中核に置いてゐるため、エロチックな空想が第一になる。併し男にあつてもエロチックな欲求が又その背後に隱れてゐる。總ての英雄的行爲や成功も畢竟するに婦人の賞讃と寵愛を求める手段と言へる。この『畫の夢』は非常に色さまざまであり、その運命に至つても非常な相違点を持つてゐる。その多くのものは單時間で消失し、それに代つて新しい内容が這入つて來、又あるものは固くこびりついて、長い物語を展開し、人生の浮沈に應じてその姿を變へて行く。例へば時と共に行進すると言へる。そして新しい境涯の影響によつて釀された『日附』に役立つのである。『畫の夢』は詩作の材

料となつてゐる。詩人は自分の描く畫の夢を變形し、粉飾し、簡素にして、小説、物語、劇に盛るべき場面を作り出すのである。『畫の夢』の主人公は常に直接に自分自身か、さもなくば間接に自分を他の姿で包んで描出するのである。『畫の夢』の内容は、眞の夢の内容と同樣に現實的でない事實を示すため、現實に對する同一關係を意味してかくは名付けられたのであらう。併し、二つが夢といふ名稱を共有する特点は、畫の夢がこれから私達が研究しようとする夢の未知の心理特徴に接觸してゐるからである。考へ方に依つては、二つが夢と言ふ名稱を共有してゐるのは非常に意味深いと考へても決して不當でないのは、今後説明する所から理解出來るであらう。

□風流の極を盡さうとした歌よみの坊主と公卿とが長柄の橋の鮑屑と井出の蛙の皮とを持ち寄つて珍を競つたと言ふ話は有名だが、それとは違ふけれどもそれを想はせる話が西洋にも有る、デカルトが同時代の快樂説の哲學者ガッサンディを罵つて「シエエル」（肉め）と言つた所が、ガッサンディも負けてゐずデカルトの事を「エスプリイ」（魂め）と罵り返した。之はつまりお互に肉と魂とを持ち寄つて有力を競つたわけであるが、後人の説に依ると、肉と魂との喧嘩だけに、惜しい事に之は肉と魂と兩方半分づつ持ち合してゐる唯の人間には通用しまいと言ふことである。

日本民族は何處から來たか（二）

土田杏村

(1)文獻的研究（續き）

第三、文獻的研究にあつては、其の資料が上代に遡れば遡るほど、其上に文化學的、民族心理學的批判を加へることが必要とせられる。言ひ換へれば、其の文獻に記錄せられて居る事物事象の意義を現代の其れにより理解してはならなくなるのである。

其の一つの例に首飾、腕輪がある。此れは敢て文獻的研究方法の場合に限つた事では無く、考古學的研究の場合にも同じことは言へるのであるが、首飾腕輪と言へば、多くの人は無條件的に此れを古代に於ける裝飾品として理解し、其間に美的意識の發達を尋ねようとする。併しながら首飾腕輪を裝飾品として理解するは、實は我々の現在の意識を以ての其れである。民族心理學的の研究に隨へば、此等のものは原始的には裝飾としては發達しなかつた。原始人は其の生活に其れだけの餘裕を持たなかつたのだ。彼等にあつて首飾腕輪は一の呪的用具であつた。其れを身に裝つて居れば、環境たる自然の加へる傷害より免れることの出來る何等か呪的なる神祕力が其等の中には籠つて居ると考へられて居た。原始人にあつては、大自然に對抗する實力が乏しかつたから、幾分でも其の力を緩和することの出來る呪的儀式や呪的用具やは、彼等の中に殊に重んぜられるものであつた。記紀其他の文獻に隨へば、神代には蛇の比禮（ひれ）、蜂の比禮をはじめとし、種々の比禮といふものを存して居るが、其等は一種の護符やタリズマンやである。後漢書の東夷傳が倭人の俗を記した中に、『行來海を渡るに一人を して櫛沐せず、肉を食はず、婦人に近づかざらしめ、名づけて持襄といふ。若し途にありて吉利なれば則ち願るに財物を以てし、如し病疾、害に遭ふことあれば、以て持襄の謹み得ざるがためなりとして便ち共に之を殺す』とあるけれども、我國の文獻には此の俗は記されて居ない。併し文獻に現はれた所謂比禮の中には海行のためのものも含められて居るから、周圍すべて海を以て環らされた我國の古俗に此事は或は存したかも知れない。東國のアイヌ人遺物としては人面を土盤面に薄彫りした扇形小判形、長方形等の護符卽ち土盤と稱するものが發掘せられる。此の如く我國の古代に生住した民族は、アイヌ民族にせよ天孫民族にせよ、すべて護符及びタリズマンの觀念を持つて居たものであり、隨つて首飾、腕輪等の原始的意義卽ち其れの效用は呪的威力に外ならなかつた。此事はすべての民族の原始時代に就て言へるのである。ヴントの如きは、我々のすべての衣服の原始的意義を實用的又は裝飾的のものと見ず、呪的のものと見て居る程である。首飾、腕輪を美的裝飾と考へるに至つたのは、文化の發達がよほど進んだ後のことであり、其の時代といへども其れの呪的意義は悉く滅亡して居るのでは無かつた。然るに我々が現に此等のものを見る眼は、主として裝飾的のものであるから、首飾、腕輪といへば古代に於けるものをも無條件的に裝飾的意義のものとして考へがちであるが、此れは方

法論的に誤謬である。

我國の上代に宇多我岐（歌垣）又は加賀比（嬢歌）の俗あるは、人の熟知するところである。青年男女が互に其の戀情を交換するため、或は丘上、或は市の端に集合して歌舞したのが其れてあり、概ね春秋の二季に行はれた。東國では筑波山の嬢歌、畿内及び西國では大和の海石榴市肥前の杵島が岳の歌垣が有名であり、筑波山については萬葉に『いざなひて少女男の、往き集ひかゞふ嬢歌に、人妻に我もまじらむ、わが妻に人もこと問へ、云々』の長歌を殘し、海石榴市については武烈帝が太子の頃、鮪の臣と物部麁鹿火の娘影媛を爭つた逸事が傳へられて居る。此の歌垣又はかゞひを論ずる時には、人は多く後世の盆踊りと對比し、盆踊りは此の歌垣の遺風であるといふが普通である。併し此の論證は單に獨斷的に行はれたものであり、歌垣と盆踊りとの史的關係を示すに足る確かな資料はすべて缺けて居る。たゞ歌垣の内容を後世の意識によつて忖度すれば、いかにも盆踊りに類似して居るといふだけの事であつて、上代人の考へて居た歌垣は、我々の忖度する其れと内容に於て大いなる相違を持つたかも知れない。此等の兩者を正しく比較するためには、歌垣を上代文化の體系の中に置き、盆踊りを近代文化の體系の中に置き、さて此等の背景を顧慮して互ひに比較することが必要である。單に或る一事の類似により孤立的の比較を爲すは危險である。眞に歴史的の發達を考へるとすれば、海石榴市の歌垣の如きは、其後遊女の俗に移つて行つたものかも知れない。

此等の實例によつても知られる如くに、古い文献の中に現はれた事物事象の意味を考へるとき、我

々は知らず識らず現代人の意識によつて理解するを得る事物事象の意味を以て置き換へがちとなるのであるが、此れは方法論的に誤つて居る。然らば古代の事物事象の正しい意義を理解するにはどうすればよいかと言へば、文献的研究方法以外に文化學的、民族心理學的の研究方法を取り、たゞ其の文献的研究を補充して行かなければならない。此の注意は、現に文献的研究を主として取つて居る史學者によつては、最も忘られて居る樣に見えるのである。

第四、文献に記錄せられて居る事實の内容は、此れを一つの説話となすがため、其の説話の傳承者により、記錄者により體裁よく修飾せられて居る場合も少くない。文献的研究方法のみを取つて居る史學者は此れに批判を加へず、説話を直ちに事實として受け取りがちであるけれども、我々はかゝる方法を取らず、先づ其の説話のどれだけが事實であり、どれだけが修飾であるかを判別しなければならない。説話の修飾は人間の想像力に胚胎するものであるから、其の形式に於て常に自由であり、隨つて或る文献の記錄の何處までを修飾として考へてよいかを知るは不可能のやうに見えるけれども、實際はさうで無い。説話は形式に於て無限に自由である如く見えるに拘らず、人間の想像力の動きにはやはり或る傾向があるから、隨つて其の想像力より生れて來る説話にも幾つかの典型がある。此等の説話典型は、各民族の説話を比較研究することにより明かにせられる。其の典型を離れた記錄は事實であり、典型に合致した其れは傳承者又は記錄者の加へた修飾であると見れば、先づ大した間違ひは無い。此事は後に神話を叙する時に再論するつもりであるが、單に神話で無い記錄の部分にも、神

話的要素、なほ、より廣く言へば說話的要素は甚だ濃厚に加味せられて居る。其の說話的要素は、近代の文獻資料についてさへ見られるところであり、隨つて近代史の研究者さへ其の資料の意義を判別するためには神話學の智識を持たなければならぬ事であるが、斯樣の說話的要素は古代の資料に遡るほど豐富となる。此くして今の場合にも我々は、文獻的研究方法は先づ說話學の智識により批判せられなければならぬと言ひたいのである。

其の一例として崇神朝に於ける建波邇安王の叛の記錄を引用しよう。大毘古命は越の國に罷り往ます時、山代の幣羅坂で腰裳服した少女の歌ふを聞いた。其の歌詞は、『こはや、御眞木入日子はや、御眞木入日子はや、云々』といふのてあつた。大毘古命は其の歌詞の異樣なのが氣がゝりになつたので、一旦は通り過ぎたが馬を返して其の少女に其の歌の意味を聞いた。少女は『吾れ物言はず、唯だ歌をこそ詠ひつれ』と答へて、往方も見にず忽ちにして姿を消した。大毘古命は其れが心配になり、更に還り來て事を天皇に奏上したところ、天皇は、『其れは多分山代の國の庶兄建波邇安王が叛を計つた表徵であらう』と申された。其れから大毘古命と建波邇安王との對陣が始まる。併し此の記錄は純然たる事實の其れだとは言ひ難い。此れは說話としての一定形式を取つて居る。若し此れを一つの事實として解するならば、或は其の少女は當時山代の國に流行して居た歌謠を、其の意味を知らず歌つて居たとも見られる。急に大毘古命の樣な人が其の意味を問ひ訊したので、喫驚して遁げ隱れたのであらう。其れにしても、此の歌の意味は餘りにも露骨であり、當時其れほどの歌が流行して居たとは考へられ

ない事てある。事實の破綻はさうした處にも見られるが、其れ以上に我々に問題となることは、此く大事件の始まる前に豫言者風のものが現はれ、歌により時運を豫言することは何れの歷史にも見られる說話の一つの典型だといふ事てある。大毘古命の記事の場合にも、やはり其の典型的形式が取られて居るのてあつて、我々は此の記錄の一節を解するに、事實としてよりは寧ろ說話としての見方を取らなければならない。次に此の交戰の記錄として、泉川、葛葉、鵜河、祝園などの地名の起原を說明しつゝ其の戰況を叙述してあるけれども、此等は疑ふまても無い純然たる說話てあり、すべては後世の附會てあらう。例へば泉川の『イヅミ』は『イドミ』てあり、兩軍が相對して其處で相挑んだのてあるとか、『クスバ』は本來は『クソバカマ』てあり、建波邇安王の敗軍が其の渡津まで逃げて來た時、餘りに窘迫したため屎が出て褌にかゝつたから此の地名が出來たとか書いてある。地名の字義に關聯しその說話形式はいくらでもあるが、古事記の記者は其れを綴り合せて戰況を書いて居るのてある。

垂仁帝の時沙本毘古王の叛を計つた記錄は、記の中でも殊に生彩のある文章を以て記されて居る。併し此の場合も其の記事の大半は事實では無く單なる說話てあらう。沙本毘古王の妹卽ち垂仁帝の后沙本毘賣が帝を害しようとして其事の發覺するところ、沙本毘賣が兄王の稻城に籠つて燒死し給ふところ、事實は單純のものてあらうが記事の方には餘程巧みに劇的脚色が加へられて居る。例へば稻城に籠り給うた沙本比賣が天皇の皇子を返さうとする時、天皇は力士に命じて后をも奪還しようとし、后は其事を豫知し、酒を以て鄕衣を腐敗せしめ、玉の緒をも腐敗せしめて手に纏き、髮を剃つてたゞ外

形だけ其髪が附いて居るやうに見せかけたので、力士が后の御體を牽つぱつた時には、御衣でも頭髪でもすべて脱けて了ひ、とう〳〵駄目であつたなどと書いてあるところは、說話が餘りにも說話的に拵へられ過ぎて居る。此れを讀むものは一見して其れがロオマンスとしての修飾であることを知るであらう。

以上私が批評して來たことにより、文獻的研究方法を以て古代の事實を認識する爲めには、其外に文化科學的研究方法を加味する必要のあることが幾分明かにせられたかと思ふ。（未完）

□ストリンドベルクと讀むのはいけない、ストリントベルジュだ、いや、ストリンドベルイが本當だ、いや本當はストリンドバリイだなどと一時騷いだ事が有つたが、白耳義のエルハアレンなども、獨逸流にフエルハアレンと發音してゐる人も有れば又佛蘭西流にエラアランと發音してゐる人も有る。或る画家がエルハアレンの生國フランドルへ行つた時に一体そこでは何と發音してゐるだらうと氣を付けてゐた所が、みなブウラン、ブウランと言つてゐるので初めは誰の事だか分らなかつたさうである。

□佛蘭西の法學者 Beauchampsなども普通ならばボオシャンと讀みさうであるが本當はビイチャムと讀むのださうである。

□一番面倒なのは愛蘭土のゲエリックの發音でシングの作などに出て來る Conculbar はコヌハア、Cuchulain はクフリン、Naise はニイシャ Deirdre はデヤアドラと讀むの類である。

天地玄黃

□警句は思想の閃きである。思想が抑へ難き熱情に溢るるとき必ずそこに不思議なる叡智が伴ふ。叡智は眞實を端的に捉へ盡して餘さない。閃きはそこから生れるのである。

□アリストテレスの「萬人は天性知らんことを欲す」と言ふのも一つの警句であれば、コペルニクスの地球自轉說も亦一の警句である。ゲエテの「永遠の女性」と言ふのも一つの警句であれば、エルハアレンの「總ての道は都會へ向ふ」と言ふのも一つの警句である。ベエトオエンの「苦を通じての悅び」と言ふのも一つの警句であれば、オットオ・ワイニンゲルの「生殖器が女子を持つ」と言ふのも一つの警句である。ワイニンゲルのこの怖ろしい警句の發見の爲に、ベエトオエン終焉の一室に於て二十二歲の童貞の体に拳銃を擊ち込んで死んでしまつた。

□ワイニンゲルに限らない。警句は常に死よりも强き痛苦、それ以外の何物からも生れない。同時に、警句はその人を殺した場合に於てすらも、唯だ一つ眞にその人を生かすの途であつた。何となれば、警句は、閃きは、叡智は、唯だ純なる生命がその極度の燃燒に達したその瞬間にのみ發するのである。

□叡智はその純なること詩人に如くものは無い。故に警句を生む所の思想家は常に甚しく詩人の風格を備へてゐる。イエス・キリストは最も詩人的なる思想家である。故に言々悉く警句を爲した。「人は二つの神に仕ふる能はず」と言ふも、「汝等のうち罪なき者のみ石を投げよ」と言ふのも、また「心の貧しき者は幸なるかな」と言ふのも悉くこれ偉大なる警句ならざるは無い。聖書は畢竟驚く可き一つの警句集に外ならないのである。

□警句は熱情に溢れたる思想の閃きである。故に常に直ちに人の肺腑を衝く。この故に、古來優れたる思想は常に警句の閃きが不思議の力となつて民衆の間ににじみ込んだ。例へば、ブルウドンの「專有は竊盜なり」と言ひ、ピイサレフの「世界に國境なし」と言ふが如き警句が彼等の口より出でざりし場合を想像して見よ。今日の民衆運動は奈にその力を減じられて居たか。

□大いなる思想、力强き思想、純なる思想、眞實なる思想、それは常に單純である。常に直接である。直ちに生存そのものに觸れる。力强き警句の翼に乘つて在らゆる人間の魂を搖がして飛び廻る。故に偉大なる思想は必ず流行する。

□流行するとは總ての人類がそれに依つて結び付くと言ふことである。否。寧ろそれによつて總ての人類を結び付けてゐる根柢の力を更に新しく意識すると言ふことである。

□だが、人類の生み出した在らゆる警句の中、恐らく最も大いなるものは佛陀の「一切空」と言ふそれであらう。

× × × ×

社會の改造方法にはいろ〳〵あるけれども、教化による其れほど根本的のものは無いし、また教化による改造にあつては、全般の人達を對手にすることよりも、本當に分り合つた少數の人達によつて始められる實驗ほど有力のものは無いといふのが、以前からの私の信念であつた。此の意味に於て現在の自由大學は、社會改造の方法としてちやうど私の待望して居た社會形態其儘のものだ。

繰返して言ふ。我々は教化運動を以て社會改造の最も根本的なる樣式としなければならない。宣傳ではだめだ。必らず教育でなければいけない。次に我々は多數の人達に着眼する必要は無い。他人を對手にせず、眞に分かり合つた同志で少さな集團をつくり、其處で立派な範例を示すがよい。其の範例が自づから他人に影響して行く力は强いものである。私は此外に社會改造の方法は無いといふのでは無いし、また私自身其れ以外の方法をも取らうとは思つて居るけれども、右に述べた二件はすべての改造方法の根本條件になると言ふのである。

かうした考への基礎には或る特有の社會論がある。私は其の思想を可成りに長い間自分の胸に貯へて居た。時には其の意見を論文の中で述べたこともある。然るに其れから少し後に刊行せられたテイラア氏の著『ギルド政策論』を讀んだ時、(白川威海君の譯書がある。)彼の主張と私が前に主張して居たことゝ、其間餘りにも多くの一致點あるに驚いた。テイラア氏はギルド社會主義者に特有の社會形態論及び社會理想論に隨ひ、其の改造政策論として、私が今言つたと同じい主張を爲した。

然るに私は最近また勞農露國のトロツキイ氏が其れと全く同じい主張を爲して居ることを見、ボリシェヴィズムの中にもなほ且つ其の思想あるに大いなる悅びを持つた。構成期の露國は今や根本的に其の政策を取るところへまで達したのだ。レニン氏も其の死に先立ち、今後露國の取るべき主政策は教育と經濟とであると言つた。トロツキイ氏も亦教育を論ずる事に今や全力を注いで居る。そして彼の排斥するところのものは一時的の宣傳であり、教育は其れよりもより深い意味を持つとして居る。露國を振興せしめるものは實によい範例である。其のよい範例の自づからなる影響により漸次的に改造せられ、高上せしめられて行くことが、構成期の露國の第一の任務だとトロツキイ氏は言ふのである。(K)

上田自由大學の回顧（三）

猪坂生

僕は本稿の筆を續けるに當り、僕が最近何とも言へぬ悲哀を覺えた一つの話を挿入することを許して頂かう。

上田自由大學の第一回から熱心に聽講に來た會員の中に佐々木卯吉君といふ人があつた。上高井郡日野村といふ長野市からまだ數里山手へ入つた所の人で、自由大學が開講になると、いつも講堂である神職合議所の一室へ寐宿りして、熱心に出席してゐた。流行遲れの翼の短かい外套を着てよく僕のとこへ話しに來た佐々木君の姿を、今でもハツキリ想ひ出す。ところが第二年目の第二回講座から、佐々木君の姿が自由大學へ見えなくなつた。あれほど熱心に出席し、そして「私共のやうな山奥の人間にとつては、自由大學はどんなに有難いか知れぬ」と口癖のやうに感謝してゐた君がパツタリ來なくなつたのであるから、聽講者の間にも、一体どうしたのだらうかと氣にする人が多かつた。開講の都度僕は佐々木君に出す通知狀の隅へ、『其後どうしました、お變りはありませんか』と書き添へたものである。するとその年度の終りの講座に、突然佐々木君が例の外套に烏打帽をかむり、風呂敷包を小脇に抱へて、ニコ〳〵しながらやつて來た。『稀らしいですね、其後どうしました？』と訊くと、佐々木君は急に顏を曇らして、

『あの後私の家は火事に遇ひましてね、スッカリ焼けちやつたんです、それで御無沙汰してしまひました、』と言つた。僕はビックリした、そして君の災難を心から同情した。でも講義が始まると君はいつもの熱心さを以て、懸命にノオトしてゐた。僕は君の熱心に傾聽してゐる横顔を眺めては、何とも云へぬ悲哀を覺えたものである。

ところがその年の秋、第三期の講座が始まつてから、佐々木君の姿は再び講堂に見えなくなつた。僕は思つた、火災に遇つたといふから、その後何かと經濟上の工面も惡るく、講義に出席する暇も乏しくなつたのだらうと。だから僕は講座の案内狀を出すたびに、君の宛名を書くのがつらかつた。その後もう佐々木君はズッと姿を見せなかつた。一、二度手紙を出したが何の返事もなかつた。第四年目になつてからは、僕は佐々木君に講座の案内狀を出すのを見合せた、もう君も自由大學には來られなくなつたのだらうと思つたのだ。

今度愈々『自由大學雜誌』が出來た。僕は協會にだけは佐々木君にも入つて貰ひ、雜誌も讀んで貰はうと思つたので、手紙に雜誌を添へて、久しぶりで「上高井郡日野村佐々木卯吉様」と書いて送つた。すると先日次の様なハガキを僕は受取つた。

御書面並に雜誌正に拜受致候　陳者本人卯吉事昨年死去仕候間會員を御除名被下度候　本人在世中は多大の御厚誼に預り深く御禮申上候（卯吉保護人）

僕は茫然自失した。火災に遇つた上に、死んでいつた佐々木君の限り無き不幸は、涙にも言葉にも哀措し盡されぬ。そして此のハガキを書かれた親御の心は、推察するに忍びない。

佐々木君は、自由大學の會員雜誌を作らうぢやないかとよく言つてゐた。今此の雜誌をあの佐々木君に見せることが出來ぬのかと思ふと、僕は胸がつぶれる。上田自由大學の會員諸君の中には、君を知つて居られる方が多いであらう、僕は薄命な君の消息を告げて、君の靈を弔ひたいと思ふ。

彙報

○上田自由大學

上田自由大學は三月二十一日より五日間同志社大學教授波多野鼎氏の「社會思想史」二十六日より五日間八高教授佐竹哲雄氏の「哲學概論」（文化科學の基礎なる題目により）の講座を開く、時間は毎日午後六時より三時間、講堂は上田市役所である。

○伊那自由大學

講演會　伊那自由大學は一月八日午後一時より第百十七銀行樓上に於て講演會を開き、猪坂協會專務幹事自由大學運動の趣旨を述べ、それより講師高倉輝氏は約一時間に亘つてロシヤ、印度等のお伽噺を引例して人間と貨幣に就ての暗示的な興味深き講演をされた。

文學講座　當日より五日間、毎夜六時より、天龍倶樂部に於て高倉輝氏の「文學論」（ダンテ研究）の講座を開いた。講義はダンテの生立、其時代、等より作品「新生」の解說迄。

三月の講座　十五日より五日間波多野鼎氏の「社會思想史」二十六日より五日間今中次麿氏の「政治學」毎夜六時より天龍倶樂部に於て。

役員改選　一月十二日「文學論」の講義終了後役員の改選を行ひ左の諸君が選擧された。

理事　横田憲治（再）、平澤圭二（再）、須山賢三（再）、吉澤敏二、中塚稻美、牧野元一、楯操、代田保雄

協會幹事　横田憲治、代田保雄

○松本自由大學

第二回講座　二月十日より十四日に亘り、兒玉達童氏の「哲學概論」の講座を開いた。講義は兒玉氏の近著「哲學概論」に就て認識論より自然哲學まで全部を概觀した。聽講者八十八名、これを職業別にすれば、

農業	三六	會社員	一二	商業	九
教育者	四	宗教家	四	軍人	四
醫士	二	製絲業	二	記者	二
學生	一	其他	一		

官吏　七
銀行員　三
辯護士　一

第三回講座　三月二十六日より五日間金子大榮氏の「佛教概論」の講座を開く。毎夜六時より三時間、講堂は商業會議所樓上である。

○八海自由大學

三月十四日より三日間富田碎花氏の「文學」講座を開く。

○魚沼自由大學

三月十七日より三日間富田碎花氏の「文學」講座を開く。

役員改選　理事中條登志雄君が舊臘東京アルスへ入社せられた爲め役員改選の必要を生じ今回左の如く改選した。

專務理事　林廣策、　理事　加藤金治、　會計理事　宮貞一

新刊

□ガンヂー論

（ロマン・ロオラン著、福永渙譯）

歐洲大亂は三人の偉大な社會改造家を世界の表面に送り出したと言はれる。即ち、レニン、ガンヂー、ケマル・パシヤの三人である。

日本に於てはレニンの外は餘り知られてゐない。殊にもし評者の判斷が過らずんば三人の中ガンヂーが最も暗示的であり最も豫言的であるやうに思はれる。何故かと言ふのに、レニンの爲事の大部分は已に露西亞に於て成し遂げられたかの感がある。所が、ガンヂーの方は萬一印度の獨立運動が成功したとしても決して成し遂げられたと言ふ事が出來ない。即ちガンヂーの中には尙ほ現代の機械文明の否定と言ふ最も大きな問題が殘されてゐるのである。レニンは「働かざる者は食ふ可からず」と言ふ簡單明瞭なる信條の下に鎚と鎌とを眞向に振翳してあの革命を行つたが、所がガンヂーはその鎚と鎌とさへをも否定し有らゆる生命ある者の命を絶つものを却けて牢獄の中へまで紡車を持つて這入つて行つた。ここに未來の人類世界への更に大きな暗示が有るのである。生産關係の不合理は固り斷然これを改めなくてはならない。だが、その改められた後に尙ほ殘る人類の惱み、之はもはやマルクスやレニンの關知する所で無い。それは更に根本の、更に人間的なる惱みである。その点に於てガンヂーはルソーやトルストイと相似てゐる。だが、ガンヂーはルソーやトルストイよりも更に原始基督的であり、且つどこかに原始佛敎的の風格をも備へてゐる。ロマン・ローランがトルストイは意志の力に依て基督敎徒になつた人であり、ガンヂーは天成の基督敎徒であると評したのは肯綮に中つてゐる。このガンヂー論は小冊子で有るにも關らず、極めて明瞭にガンヂーの生活とその思想とを傳へ、その近代文明に對する意味深き否定を極めて深き同情を以て理解してゐると同時に、又その短所をも憚りなく指摘してゐる。要するに、生きたる社會は絶えず動く。絶えず動くとは絶えず成長すると言ふ事である。成長する爲に今在る總ての物を一度根柢から疑つて見なくてはならない。マルキシズムやアナアキズムも要するに之まで在つた物に對する一の大いなる疑ひに外ならなかつた。併し疑ひは一にして止らない、一の疑の後に更に必ず他の疑が來る。さう言ふ意味でガンヂイの文明否定は必ず未來の社會に對する大きなる暗示となるで有らうと思はれる。（アルス發行、定價一圓廿錢）

▽前號內容△

◇日本民族は何處から來たか（一）　土田杏村
◇自由敎育の諸潮流　山本宣治
◇バッテン敎授と論文集　山口正太郎
◇足あとに咲く花・言葉　宮田碎花
◇自由大學の危機
◇上田自由大學の回顧（二）　猪坂生
◇天地玄黃　妙妙道人
◇彙報
◇新刊
◇編輯餘錄

◇編輯室より

□影のうすい雜誌をよく「三號雜誌」といふが、我が自由大學雜誌も第三號だ、これでつぶれたら文字通り三號雜誌になる、だが幸ひなことに、會員及購讀者は殖える一方、この事業に對する僕等の意氣込みは愈々熾んだ、斷じてつぶさぬ、イヤつぶれぬ、自由大學運動の熾んになるのが必然的趨勢である以上、この雜誌の發展も又必然的運命でなければならぬ。

□誌面の都合上、高倉氏の「露西亞文學研究」を又休載するの已むなきに至つた、しかし新たに安田氏の論文が載ることになつたのは愉快である。玆二三號は致方ないが、經濟の許す限り紙數を增して、うんと充實した雜誌を提供するつもりである。御期待を請ふ。

□次號から會員が勝手に熱をあげる「談話室」といふ欄を設けたい、どんな事を書いても御隨意だが、字數を二百字以內として頂きたい。

□會費（又は誌代）未納の方はなるべく早く御送附を請ふ。又御送金は振替口座へ御拂込み願ひたい。

●本誌定價

一部　金拾五錢（送料共）
一年（部十二）金壹圓六拾錢（送料共）
一年分以內は一部金拾五錢の割合にて頂きます。
△御送金は振替口座に據られたし。
△御照會は必ず往復ハガキのこと。

大正十四年三月八日印刷
大正十四年三月十日發行

發行兼編輯者　猪坂直一　長野縣長野市大門町
印刷人　清水與助　長野縣長野市西町
印刷所　柏與印刷所　長野縣上田市厩裏町
發行所　自由大學協會　振替口座長野四二九四番

著譯者	書名	定價	送料	内容
京大助教授法學士 恒藤恭	批判的法律哲學の研究	3,00	25	法理學界に其人ありと稱せらるゝ著者がカントの批判的精神を法律哲學の方面に繼承し發展しようとする見地に立ち代表的學者ラスク●シュタムラー●フリーズの思想見解の忠實正確なる研究
文學士 高倉輝	心の劇場 附「現代ロシア詩抄」	1,80	15	エウレエノフの「心の劇場」「道化芝居」の戲曲二篇バリモント●メレジコフスキイ等現プロオク●プーニン等最新しき一派に至る詩四十篇を添ふ皆現下ロシヤ文壇の驚くべき閃光
同大教授理學士 山本宣治	ニコライ原著 戰爭進化の生物學的批判	3,80	25	生物學上の新智識を基礎として、現代の戰爭と軍國主義と愛國心とを完膚無き迄徹底的に批判し痛快な成功を得た永久的名著。帝政獨逸では國禁書の一
同大教授理學士 山本宣治	性教育	2,80	21	青年の爲には啓蒙による安心と解放による悦び—子を持つ親と教育者には無二の指針—一息に讀下さる程面白く而も長く座右に具ふべき參考書
文學士 土田杏村	文化主義原論	3,50	27	文化主義高調の時に當つて確固たる哲學上の基礎上に立ち最嚴肅なる態度と信念を以て文化主義の宣傳に從ふ著者が同主義の根本原理を述べたもの現代人必讀の書
文學士 土田杏村	自由教育論	2,30	18	從來の教育學には哲學の基礎がなかつた。改造は此處から始められねばならぬ。其爲に著者は批判哲學の牢固な土臺の上に立つて眞の「教育の意義」を解明したものが本書である。
同大教授法學士 中島重	多元的國家論	2,90	19	從來の國家論に對して敢然と挑戰の巨彈を放つたマック、アイヴアー、バーンス、ホツプハウス、ロバーツ、ラスキ、コール等によりて唱導せられた新國家論の解明評論である。

東京市下京區南都洞院西入七條
内外出版株式會社
振替大阪三九六一

東京帝大助教授文學士 出隆・田中美知太郎 共譯

再版

ヴィンデルバント

プラトン

菊判布裝函入 三七〇頁 定價貳圓八拾錢 送料拾六錢

私を、はじめてほんとうにプラトンの思想に——否、彼の世界に導いてくれたのは、この書物です。これをはじめて讀んだ時、——もう二十年餘りの昔となりましたが、——その時の感激は今もなほ忘られません。……全體として、これほどまでに明瞭に力强くしかも美しく、プラトンの精神を活かし得た書物は、他に無いと信じます。(波多野博士より譯者への書簡の一節)

この書は、歷史家として藝術家として非凡の才を有する哲學者ヴインデルバントが、人とし藝術家とし教育者とし哲學的思想家とし神學者とし社會改造論者とし豫言者としてのプラトンを、その全き大いさと力强さと美しさとに於て述べたもので、初學の我々をプラトンの世界に導く最良の手引であります。そこにはプラトンの全き姿が、含蓄と力と美とに充ちた筆で描き出されてゐますので、私は今これ以上に最早や何ものをもプラトンに就ては語り得ないほどであります。……これらの意味でこの書は、今も尙ほ十分に、日本の讀書界思想界に薦めてプラトンへの入門書とし又プラトン的精神への力づけとするに足るものと信じます。(譯者序言の一節)

東京市牛込區矢來町八番地 大村書店 振替東京五七九六四

高倉輝著作集

第一輯	女人焚殺（戯曲集）	増版中	
第二輯	蒼空（長篇小説）	價壹圓五拾錢 送費 拾參錢	
第三輯	海峽の秋（戯曲集）	價壹圓貳拾錢 送費 拾柒錢	
第四輯	我等いかに生く可きか（感想集）	價壹圓貳拾錢 送費 拾參錢	
第五輯	かうして嬰兒がこの世へ生れた（短篇集）	價壹圓五拾錢 送費 拾柒錢	
第六輯	長谷川一家（戯曲集）	價壹圓五拾錢 送費 拾柒錢	
第七輯	阪（長篇小説）	近刊	

東京表 小石川百〇九 アルス 電話小石川三五七〇 振替東京二四八八八

自由大學雜誌第一卷第三號（大正十四年二月三日第三種郵便物認可
大正十四年三月八日印刷納本十日發行）